

ノーパンクリ責めカフェにいじめっ子が来店、
妻になるまでガチイキさせられ、溺愛レイプで処女まんこどちゅ♡かれた話
サンプル（一部抜粋）

「あっ♡あっ♡いっちゃう…♡」

店内に響く女の子達の声。可愛い装飾、短いスカート。隠す事もできない秘部。

「は…あっ…あ、あ、んっ♡」

ここは、来店する『ご主人様』にクリを弄られる、ノーパンクリ責めカフェ。

なんともくだらないお店だ。

お金を稼ぐために、このお店で働く私も…くだらない。

分かっていながら、見知らぬ男達にクリトリスを擦られる日々。

ローションでヌルヌルになったクリトリス。ぬちゃっ…くちゅっ…と店内に響く、淫らな音。

「ご主人様、詩織の雑魚クリいじめてください…っ」

足をわずかに開き、自分の指で秘部をくぽっ…と開いて、クリ責めを求めているフリをする。

「こんなに濡らして…詩織ちゃんは可愛いね」

鼻息の荒いご主人様の指先が、ただローションを塗られただけの私の秘部へと近づく。

「は…あつ、あ…つ、コリコリ…きもちい…つ」

頭の中でお金の計算をしながら、可愛い声を出す。わざとらしくないように、びくんと身体を震わせる。

全部全部演技だ。

私は…お金さえ稼げたらそれでよかった。

だってお金があれば…弟が幸せになれるんだから。

私の名前は橘詩織。お金の事しか考えていない、どうしようもない23歳の女だ。

私がそこまでお金に執着するのは…中学生の弟を育てなきゃいけないから。

高2の時に両親が事故で亡くなり、頼れる人もいなくて…大切な弟を施設に送るなんて出来るわけもなく…大学進学を諦めた。

9歳も年下の弟…。私の未来はもういい。弟が立派に育ってくれたら、それでいい。両親が亡くなった時、そう覚悟を決めた。とはいえ、現実はそんなに甘くはなかったけど…。

「お姉ちゃん…ごめん…制服が小さくなってきて…」

お金がかかる度に弟がいつも申し訳なさそうに、声をかけてくる。

まだ子供なのに……。お金の心配なんてさせずに、普通に過ごしてほしいのに。

「大丈夫だよ。新しい制服買おうね。」

お金があれば……。幸せになれる。

そのためには……。どんな仕事でもしてやる。尊厳も羞恥心も……。もうどうだっていい。姉として、保護者として……。やれることはなんでもする。

その思いだけで、お金の為に夜の世界に入り、私は突っ走って来た。

まさかこの店に、かつての同級生……。いじめっこの桐生が来店することになるなんて、想像すらせずに。

（中略）

「橘……？」

背後から低い声が聞こえてきた事で、私の平穏は音を立てて崩れ始めた。

ここでの私は、ただの詩織だ。

名字で私を呼ぶ人はいないし、誰も私の名字なんて知らない。

つまり……。私の後ろにいる誰かは、明らかに……。私を知っている人だという事だ。嫌な汗が背中を伝うのを感じながら、反射的に慌てて振り返った。

「え……」

だけど振り返った瞬間、反応してしまった事を後悔した。

だってそこにいたのは、高校の時の同級生……いじめっこの桐生だったから。

185センチの高身長、整った顔、高級そうなスーツ、意地悪な目……

間違いない……桐生理久だ。

女の子の可愛い声が響く店内の音が、一気に遮断されたように遠のく。

耳がキーンとして、だからだと背中に汗が流れ、顔から血の気が引いていくのを感じる。

……

「親無しになったんだって？」

地獄のどん底にいた時、あざ笑うように言葉を吐き捨てられたのを、私は今も許していない。

「お金、恵んでやろーか？毎日白飯のおにぎりだけ持参して、可哀想アピールか？」

親が大会社の社長をしている桐生にとって、私は本当にみじめだったんだろうな。

笑いながら机に一万円札をたたきつけられたっけ。

「……いない。」

お金は喉から手が出るほど欲しかったけれど、この男からは絶対に恵んでもらったりしない。

そんなプライドで跳ねのけたけど、それが気に入らなかつたんだろうな。

親が亡くなるまでは大して関わりもなかつたのに、その日を境に絡まれるようになった。

嫌味な言葉、見せびらかされるお金、見下した視線……。全てを鮮明に覚えてる。クラスのリリーダ的存在だった桐生の態度のせいで、周りの取り巻き達にも散々嫌がらせをされ、虐められた。

全ての元凶は…この男だ…。

(中略)

「一体何人に弄られてきたんだ？」

耳たぶに桐生の唇がそつと触れ、ちゅつと甘い音が淫らに響く。

「ひ…あ…っ」

「質問に答えろよ。」

ちゅっ…くちゅ…と音が湿っぽく響き、ぬちやつ…と耳を舐められる。

「ひゃ…あ…や、だめ…っ」

鼓膜にぬちやつ…ぐちゅっ…と音が届く度に、背中に電流が流れるようなおかしな感覚が走る。身体のを強制的に奪う舌の動きと音に、ぞくぞくと身体が震える。

「耳…だめ…っ」

掴まれた手首から逃げようと身体を動かしたけれど…その瞬間にガシッと首の後ろに腕を回され、桐生の唇から耳を離せないように固定されてしまう。

「は…あ…や…あ…」

無反応でいなきやなのに、こんな反応、桐生を喜ばせるだけなのに……
なんで勝手に声が漏れてくるの……

自分の反応に戸惑いながらも、身体がブルブルと恐怖と変な感覚で震えだす。

「早く質問に答えなよ。」

桐生は私の内ももをなぞりながら、ゆっくりゆっくりと焦らすように指を上へと滑らせる。

「っ、しら……ない……っ」

「……答えになってない。」

「何人でも……桐生には関係ない……でしょ……」

耳元で響く低い声が鼓膜を震わせる度に、身体がびくと跳ねる。反応なんてしたくないのに、
気持ちよくなってるわけないのに……

身体が芽吹くような熱さに気付かないフリをしながら、必死で言い返す事しか出来ない。

ただどその瞬間、内ももを這い上がっていた桐生の指がコリッ……と私のクリを弾いた。

「は……っ、あ……あ……っ……」

ビリビリと感電したように走る異様な快感。

「関係ないとか、関係あるとか……どうだっていいんだよ。」

こりっ……こりっ……とゆっくりとローションが塗り込まれたクリの上を、指が妖艶に動く。

いつもはこんな風に身体が跳ねたりしないのに……どうして……？

耳元で響く低い声が、あまりにも執着的で危険だから……？

「仕事だから」と割り切って他の『ご主人様』には無反応だったはずの身体が、桐生の触れ方や声にはなぜか敏感に反応してしまい、頭の理性と身体の裏切りにパニックになる……。

「や……あ……は……っ、ん、ん、あ……っ」

「自分の立場、分かっている？」

お前……確か弟がいたよな。弟は知ってんのか？自分の姉が、見知らぬ男達にクリトリスを弄られて生活費を稼いでるって。」

「っ！」

桐生のその意地悪な言葉に、思わず弟の顔が頭に浮かぶ……。あの子は……私の仕事なんて知らない……。知られるわけにはいかない。

絶対に……軽蔑される……。

それに優しいあの子のことだ。自分のせいでお姉ちゃんがこんな仕事を……って、自分を責めてしまうかもしれない……。

今、自分が生活の為に割り切ってやっている仕事のグロテスクさと……それをよりにもよって最悪のいじめっ子である桐生にバレてしまったという事実には、頭が真っ白になる……。

（中略）

「そうだよ。俺は使えるカードは何でも使う。欲しいものはなんだって…手に入れる。卑怯で結構だ。」

それでお前が手に入るなら。」

淡々としている声なのに、どこか愛の言葉を囁くような甘さが混じる。私が手に入るなら…？
どういう事…？

イジメをするくらい、私の事が嫌になくせに…。私を困らせて、泣かせて…喜ぶ狂った人間のくせに…。

「弟にばらした後はどうしようか。」

軽蔑されて孤立していくお前を、一番近くで見たいなあ。」

クスクスとわざとらしく笑いながら、最悪の未来を提示する。そのくせ、執拗な指はずっと私のクリをこりっ…♡こりっ…♡と強弱をつけて、擦り続ける…。

「ん、あ、やつ…言わない…で…っ、弟には…だめっ…ん、ふ…指とめ…てっ…」
びくんびくんと跳ねる身体を止められない。なんで…。

（中略）

「……あっそ。」

ただどその瞬間、桐生の眉間に深い皺が入り、クパッとクリをむき出しにされ、ゴリゴリと指の腹でクリの先端をしごかれた。

「んぐっ、ああああ…っ、や、あぁっ」

直接敏感な場所をゴリゴリとしごかれ、強烈過ぎる快感に悲鳴を漏らす。

身体をのけぞらせ、なんとか指から逃げようと上へと身体をずらそうとしたけれど…

「逃げても無駄。

お前の反応を見れば、いき慣れてるようには見えない。どうせ…くだらない嘘だろうけど…俺の今の気分は最悪だ。」

桐生は怒った顔でそう言いながら、上に逃げる私の足を引っ張って、引き戻す。

「は、あ、あ…やだ、あぁっっ、そこっ」

ぬちゃっ…くちゅっ…と甘い音と共に刺激が走る度、私の身体はビクンビクンと跳ね上がる。

この男の前では、自分のプライドも嘘も一切通用しないのだと思い知らされる。

「また…いつちやうから…あぁあぁっ…」

涙をポロポロと流し、抗えない快感へと沈んでいく。

桐生は私の反応を、一つも見逃さないようにじっと見つめるだけで…何も言っただけで…ほくれない。

「お願いっ、やだ…あぁあ、いつちや…ぐっ…あぁあぁっっ!!」

身体を跳ね、強制的に快楽の海へと突き落とされる。許容範囲を越えた快感が、涙となってポロポロと絶え間なく流れていく。

その間も…桐生の指は止まらない。

「今、だめっ、や…あぁあぁあぁ…っ!!」

(中略)

「…気に食わない。」

「…え…?」

桐生はスッと立ち上がり、凍えるような視線で私を見つめ…ぎゅっと腕を握ってソファへと投げられた。

「っ!や、なにをするの…!」

「何もかも気に入らない。」

お前が他の男に、しかも不特定多数に、そんなおねだりをしていたと考えるだけで…頭がおかしくなりそうだ。」

(歪んだ純愛の溺愛レイプは製品版にて)